

第二節 『出雲国風土記』の須恵器生産記載について (古代文化センター 平石 充)

1. はじめに

天平5年に成立した『出雲国風土記』には、島根郡大井浜で「造陶器」の記載がある。この記載は数少ない8世紀における須恵器生産、とりわけて畿内以外の地域における須恵器生産についての文献の記述として注目されてきた。また、大井浜に該当する松江市大井町周辺には、いわゆる大井窯跡群が展開し、『出雲国風土記』の記載がこの窯跡群の操業に関わるものであることは明らかである。

この大井窯跡群は、古くは野津左馬之介氏による『島根県史』以来取り上げられ、多くの研究がある。なかでも風土記に記載された8世紀前半の窯の性格については、柳浦俊一氏は国府・国分寺などが須恵器生産に与えた影響は少なく「須恵器工人とその統括者が主体的に生産と流通を展開していた」と想定し(柳浦1989)、一方、内田律雄氏は在地有力首長によって須恵器生産が掌握されていると述べる(内田1988・90)。大井浜での須恵器生産の性格については、製品である須恵器製作技法・製品の用途・分布、窯・窯場の構造や所在地をはじめとして、生産地・消費地を取り巻く地域の権力構造、当該時代の交通・物流のあり方、以上の歴史的変遷などいろいろな観点から総合的に検討する必要がある、本論の良く言及するところではないが、『出雲国風土記』という文献史料に登場することからすれば、文献上この「造陶器」がどのように扱われているかについては検討する必要があると思われる。以下、大井浜の須恵器生産について『出雲国風土記』記載から若干の考察を加える。

2. 『出雲国風土記』記載について

『出雲国風土記』の須恵器生産の記載は以下の通りである。

【史料1】島根郡大井浜条 大井浜 則有海鼠・海松、又造陶器也。

ここではまず、大井浜の「造陶器」記載が、風土記の構成上どのように記載されているかを検討するものとし、比較史料として他の手工業生産物である鉄・玉についての風土記の記載を挙げてみたい。

【史料2】仁多郡横田郷条 横田郷(中略)以上諸郷所出鉄、堅尤堪造雑具。

【史料3】飯石郡波多小川条 波多小川 源出郡家西南二十四里志許斐山、北流入須佐川。有鉄。

【史料4】同郡飯石小川条 飯石小川 源出郡家正東一十二里佐久礼山。北流入三屋川。有鉄。

【史料5】意宇郡忌部神戸条 忌部神戸 郡家正西廿一里二百六十步。国造神吉詞奏参向朝廷時、御沐之忌玉作。彼云忌部。(下略)

【史料6】意宇郡長江山条 長江山 郡家東南五十里、有水精。

【参考資料】『延喜式』神祇三臨時祭式 凡出雲国所進御富岐玉六十連、毎年十月以前令意宇郡神戸玉作氏造備、差使進上。

まず鉄は計3カ所に見られ、このうち仁多郡の史料2は「所出」とされ、飯石郡の史料3・4は「有鉄」と記載される。結論から言えば、後者の「有鉄」は、鉄資源(具体的には砂鉄)を採集する場所の記載と考えられ、鉄製品生産者の所在・生産地を示すのではない。すなわち、『出雲国風土記』では史料1にもみえるように、草木・海藻など採集対象物は「有」「生」などと記載されるからである。

(他に動物も「有」の記載が多い)。

残る史料2では、鉄について郷の条文に「所出」とされることが特徴といえる。この「諸郷所出鉄」については、賦役令調絹絶条で調の品目について「並随郷土所出」に対応する表現であり、「郷土」は郡、最終的には郷を単位とすること(『令集解』賦役令調絹絶条諸説)から明らかなように、「横田郷ほか仁多郡の所郷の調雑物として鉄(加工用の鉄素材)がある」という意味の記載であろう。なお、史料2は一見すると横田郷の記載にみえるが、仁多郡の全ての郷に当てはまるものとして同郡最後の横田郷に記載されており、実質的には仁多郡の調の記載と考えることができる。

次に玉についてであるが、史料6は鉄で述べたように原材料の産出地の記載である。一方、史料5には「忌玉作」とみえるが、これは忌部神戸の産物記載ではなく、あくまで忌部神戸の地名起源伝承部分に当たる。したがって、厳密には忌部神戸での玉生産についての記載はない、とも言えるが、これは地名起源説話で「忌玉作」を説明したうえで産物として再び「玉作」を記載することを避けたためであり、風土記編者は忌部神戸条に玉作を記述したと考えておく。なお、実際の忌部神戸での玉作については、参考資料によって忌部神戸の玉作氏によってなされたこと、すなわち忌部神戸の構成員によってなされたことは明らかであり、上記の説明と矛盾しない。

ここで史料1と史料2・5を比較すると、前者は空間的に大井の浜を内包している可能性のある朝酌郷条^①ではなく、後述するようにいわゆる海岸記載の中で浜の記載として取り扱われている、また「有…」の記載の後に「又」として第二義的に記載されていることも注目される。これに対して後者は郷(神戸)の条文に記載されており、玉で確認できるように、その郷の構成員が生産に当たったと風土記編者が認識したと考えるのが順当である。

以上の比較検討から、調雑物としての鉄記載が風土記中にある以上、「造陶物」を調雑物として位置づけることは難しいこと、また、須恵器生産が「浜」に記載されることの特性が明らかになった。

では、史料1の「大井浜」のような「浜」は風土記でどのように位置づけられているであろうか。ここで島根郡条を見ると、大井浜条は大きくは「南入海自西行東」とされる入海(現中海)のいわゆる海岸記載に含まれている。この「浜」については、既に内田律雄氏ほかの論者が指摘するように、一定の集落を持つ海浜(内田氏は端的に漁村とする)であると考えられる(内田1988・瀧音1997)。

ただし、この「浜」が単なる集落のある砂浜の地形の記載でないことは、「浜」の記載40箇所のうち38箇所が島根半島の日本海側に集中し、入海沿岸にはこの大井浜・意宇郡門江濱の2浜のみの記載しかないことから明らかである^②。たとえば松江市竹矢町付近は風土記が記載された頃は中海沿岸の砂州であったと推定され、残存する地名と筑陽社の位置からこの砂州上に『倭名類聚抄』の筑陽郷が形成されたと考えられるが、風土記に「浜」の記載はない。一方で、島根郡の「浜」の記載には「捕志毘魚」との記載のある「浜」がある(宇由比浜ほか)。これは、単なる漁場とは考えられず(先述のように捕獲対象の動物の生息は「有」と記載される)、浜の住人が志毘魚を捕ることに由来する。

以上の点からみて、「浜」は海に関わる何らかの特殊性、たとえば志毘魚の採取にみられる生業などに起因する集落を示している可能性がある。そして、風土記の編者は「造陶器」の記載場所として、朝酌郷を選ばず、このような特色を持つ「浜」に記載した点は看過できない。「浜」の性格については

さらに検討が必要であり、本論ではいわゆる漁民が須恵器生産に従事したとただちに論ずるつもりはないが、大井浜の「造陶器」＝須恵器生産は、調の収取・国郡郷制の行政区分から比較的距離を置いた枠組みで行われたことの指摘は許されるであろう。

3. おわりに

以上、『出雲国風土記』にみえる鉄・玉記載との比較から、「造陶器」記載の特質について検討してきた。そこからは、風土記に記載される須恵器生産が律令調制に内包されないこと、また生産者集団は国郡郷制と直接は重ならないことが明らかになった。

須恵器生産については生産に当たる部民が存在しないことや、国家による直接生産体制の不備が指摘されている（浅香1971）。『出雲国風土記』にみえる「造陶器」記載の特質も、これらの律令制下の須恵器生産全般についての指摘に当てはまるものと考えられる。

ただし、このことは直接的には生産体制・労働力編成の枠組みの問題であり、大井産須恵器の供給先に国府があることや、大井窯跡群における須恵器生産の画期と国郡制の施行・律令国家の成立との関連性を否定するものではない。また、須恵器生産の集約性や分業の必要性を考えると、古代にあっては地域権力構造と須恵器生産が無関係とは想定できない。浅香氏の指摘するように、交易を前提とした生産・流通体制を想定したうえで、あらためて権力や交易圏との関係を検討する必要があるだろう。

註

- (1) 松江市上宇部尾に位置する四反田窯跡については、手染郷に含まれるとの見解もある（加藤義成1957『出雲国風土記参究』松江今井書店）。
- (2) この他、島根郡朝酌促戸条の条文内に「南北二浜」の記載があるが、これは独立した条項として扱われていないので除外する。また、意宇郡門江濱についても、「伯耆與出雲二国堺」とされる。国堺の地点の自然地形の記載にすぎず、島根半島の「浜」と異なる可能性もある。

参考文献

- 浅香年木 1971『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局。
- 内田律雄 1988・90『出雲国風土記』大井浜の須恵器生産（上）（下）『古代学研究』118・120
- 瀧音能之 1997「古代の出雲と海」『古代文化研究』5
- 柳浦俊一 1989「出雲・大井古窯跡群の須恵器生産と流通」『島根考古学会誌』6